

## 第74回日本社会学会大会報告

長 光 太 志

### シンポジウム 2

社会調査の困難を巡って：社会の中の社会調査

司会者 櫻井 厚（千葉大学） 片岡栄美（関東学院大学）

発表者 玉野和志（東京都立大学） 「サーベイ調査（Social Survey）の困難  
と社会学者の課題」

山口一男（シカゴ大学） 「二次データ分析の問題と展望」

宮内泰介（北海道大学） 「市民調査という可能性」

山田富秋（京都精華大学） 「『啓蒙主義以降』の調査の可能性を探る」

内藤和美（群馬パース看護短期大学） 「暴力被害と調査研究」

第74回日本社会学会大会のシンポジウム 2 では、「社会調査の困難を巡って」と題し社会調査の持つ意味あるいはその在り方が、五人の先生方の発表とディスカッション、そしてそれに対する質疑応答という形式の下で考察された。議論の主要なポイントは「社会調査の対象を如何に扱うか」という点に収斂したように思われるが、その前に先生方の発表の要旨を通じて、個々人の理論的立場を確認しておきたい。櫻井厚先生は、「サーベイ調査（Social Survey）の困難と社会学者の課題」と題して、先生御自身の調査体験から、この20年間のサーベイ調査の動向とそれに関する考察を行われた。考察の骨子は、社会調査の対象者の意識の変化を指摘されており、そこでは従来言われているような「市民の社会意識の低下」説ではなく、むしろ対象者が自らの社会的利害に敏感になり、素朴な大学研究への信頼から脱却しつつある現実が示された。続いて山口一男先生からは、「二次データ分析の問題と展望」というテーマから、アメリカにおける二次データ利用の状況を説明し、様々な問題を孕みながらも、二次データの頻繁な利用が、データそのものの公共性・科学性を審査する篩いとし

での機能を果たしているという指摘がなされた。三人目の宮内泰介先生は、「市民調査という可能性」という視点から、職業科学者が行う「客観的な（という名のもとに問題解決志向が低い）」調査よりも、未熟で制度的サポートも完全には確立してはいないが、問題解決の主体と調査の主体が近い市民調査の方が、有効性の高い調査をなし得る（得ている）という提言が出された。さらにそれを受けて山田富秋先生が『『啓蒙主義以降』の調査の可能性を探る』という展望に基づいて自らの会話分析を公開し、批判的考察を加えられた。ここでは自らの位置をニュートラルなものとして特権化し対象を計る行為の危険性が説かれ、調査者と対象者の新たな関係構築の意義が語られた。最後の内藤和美先生からは、「暴力被害と調査研究」という御自身の研究テーマで発生した研究者（調査者）と対象者（被害者）のトラブルが報告され、暴力被害というナイーブな研究領域では、他の分野の調査以上に調査者の視点の特権化が対象者を傷付けているという事実が浮き彫りにされた。

これらの領域の異なる先生方からの報告・考察は、その後のディスカッションおよび質疑応答を経て、調査の現場が孕む葛藤を鮮明に見せてくれた。それは、「社会的有用性（学問的意義）／対象者の利害（実利的報酬）」という対立軸と、「啓蒙主義的調査／ポスト啓蒙主義的調査」という対立軸が織り成す葛藤であると言って良い。もとより正解の出る問題設定ではないので、「対象者の実利と重ならないような調査は社会的意義がないと見なしでも良い」という見解と「調査は対象者の利害を意識して行うものではなく、そのような無駄な幻想を抱かせることが調査環境をより劣悪化していつている」という視点のぶつかり合いに対して、「どちらにしろ超越的な調査者が対象者の望まないカテゴリーを振りかざしているだけだ」といった指摘がなされるような白熱した議論となった。当然の事として、どの立場にも一長一短が存在し、結論的には「個々の研究者が現場に沿った視点を採用しつつ、シンポジウムで明確になったような葛藤と、誠実に格闘しなければならない」という所に落ち着かざるを得ない状況となった。しかしこれはシンポジウムの問題設定の甘さというよりも、学問が内在している良い意味の葛藤状態の顕在化であっただろうと思われる。

以上をもって、第74回日本社会学会大会シンポジウム2の報告を終了します。

（ながみつたいし 佛教大学社会学研究科社会学専攻修士課程1回生）